

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Notes on Fishing Activities in Okidomari, Shimane Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大胡, 修 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004546

島根半島一漁村における漁撈活動

大 胡 修*

Notes on Fishing Activities in Okidomari, Shimane Prefecture

Osamu Ogo

This note describes the fishing activities of a coastal village in Okidomari district, where a variety of techniques such as netting, spearing, rod and line fishing are utilized.

はじめに

1. 沖泊の概要

2. 漁撈活動

1) 漁場と<ヤマミ>

2) 漁 期

3) 釣 漁

4) 網 漁

5) 見突き漁

6) 磯ものとり

おわりに

は し め に

本稿は、島根県八束郡島根町沖泊で実施した漁撈活動に関する調査報告である。以下で扱う素資料は、昭和50年10月29日—11月6日および同51年5月6日—5月12日の2度にわたっておこなった実態調査で得たものである。本稿の調査地である沖泊地区は、地先漁場を主たる活動の場としてきた小漁村である。もとよりそうした漁撈活動は、このムラの置かれている集落立地および周囲をとりまく自然的・地理的なさまざまな条件による制約を無視しては考えにくい。そこで本稿ではかかる点をふまえ、その漁撈活動がどのように展開してきたかを記述していきたい。記述にあたっては、現在このムラの主要な漁撈活動となっている釣漁、網漁、見突き漁、磯ものとりなどの4つの漁法を中心としながら、ムラ人の漁撈技術から触れていくことにする。ここでいう「技術」とは、潮の流れ、風位、海洋生物の習性などに関するムラの人々の知識の総体

* 国立民族学博物館第1研究部

を意味している。

なお、本報告は昭和50年度から昭和52年度にいたる文部省科学研究費(一般研究A)の補助を得て実施された共同研究「日本村落社会における物質文化の地域的比較研究」の報告の一部をなすものである。

1. 沖 泊 の 概 要

沖泊は、島根半島の北端に位置する島根町の一小字であり、行政的には隣接する多古地区とともに一つの大字を形成している(昭和50年11月現在, 33世帯。130人)。

島根半島の多くの沿岸漁村がそうであるように、沖泊もまた背後に急勾配の山をもち、山すそからくナダ>(船寄場)に至るまでの狭小な土地を生活の場としながら、地先での漁撈活動をおこなってきた。ムラ人が主な漁場としてきた地先は、岩礁の多

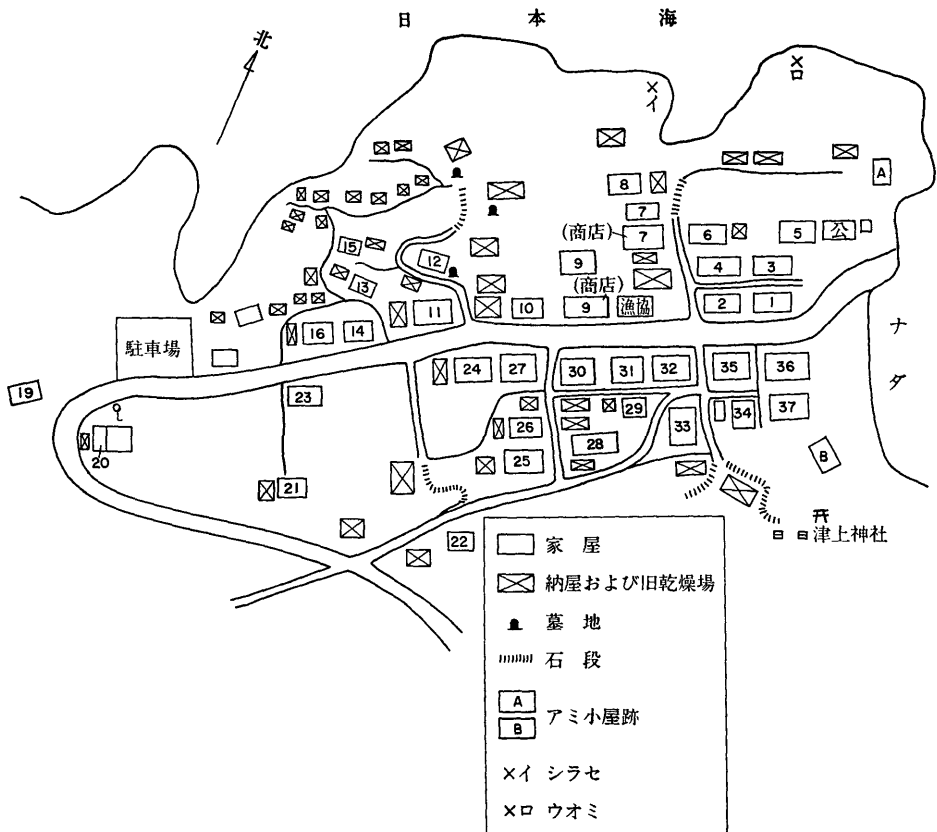


図1 沖泊の概念図

い、入り組んだりアス式海岸を形成している。こうした地形は、古くからムラ人にとって恰好の漁場となってきたが、一方では港の拡張工事には大きな障害となった。比較的湾が広く、岩礁の少ない隣りの多古地区が、沿岸から沖合漁業へと新しい流れに乗れたのにくらべ、沖泊が今日まで、沖合漁業に展開できないでいる大きな要因にこうした自然・地理的条件があげられる。そして、それは一方では早い時期から戸数の飽和状態をうみ、新たな分家創設をむずかしくしてきた。ちなみに、ムラ人の記憶する最も新しい分家は、戦後、部落外へ分家した例を除くと大正12年であり、それ以後は一度もない。この分家創設の制限にみられる部落規模の適正化への強い指向は、たとえば、各戸の持舟の所有数を1パイ（隻）に制限したり、あるいは、かつておこなわれていたといわれる間引などのような、社会的規制となつてあらわれた。

他方、地先での小規模な漁撈活動以外にこれといった生産活動をもたないこのムラでは、とりわけ、若年層の流出を消極的にせよ促進させている。

沖泊の歴史的形成、発展過程は明らかではない。わずかに「千酌(八束郡美保関町)の漁師が沖で遭難し、ここに流れてそのまま住みついた」とか、「分家してもう200年ほどなるが、何代前に分かれたか知らない」というムラ人の話に歴史の古さをかいまみるぐらいである。

図2は、ムラ人の認識している本・分家関係を図上に示し、各戸の現在位置を中心として分家創設過程における住居の展開をみたものである。ムラ人の語るムラの歴史に、かならず登場するのが①、③、④、③④、③⑤の5家で、いずれも草分けとされている。とりわけ、①はこのムラの<センソ>(先祖)と認識され、もっとも古い家と考えられている。また、古くは⑩の家より西側(図中の点線枠内)は沼地であったと伝えられている。いずれにせよ、草分けとされる5家が<ナダ>にもっとも近いところに位置し、それから分岐した直接分家がすべて西方、つまり<オカ>(陸)側に創設されていることから、このムラの発展が、ほぼ東から西へという展開をみたことが理解されよう。また、それらの5家がこの地に定着し、分家を創設した当時は、今よりもさらに狭小な土地であったと考えられる。これは、5家からの直接分家が⑩の家を西限として、<ナダ>から⑩までの範囲にとどまっているところからもうかがえる。

しかし、図2でみた分家創設の過程は、このムラの家が多くが100年以上の歴史をもっていることからわかるように、かなり以前に停滞していた。つまり、すでに触れた立地条件を背景とした戸数の適正化という規制が早くから生じていたものといえる。

以下では、こうした自然・地理的条件を背景として営まれている漁撈活動について概観していこう。

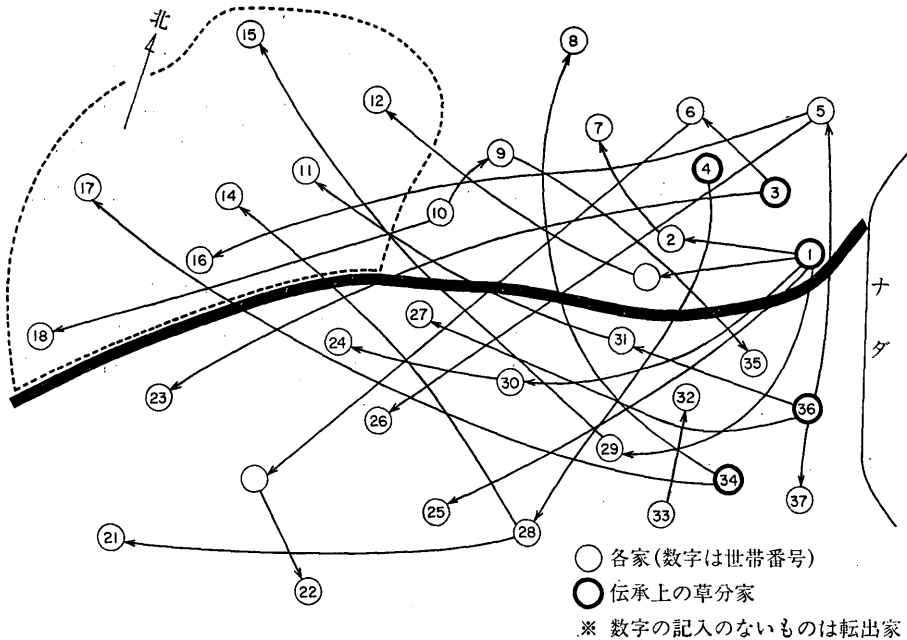


図2 ムラの形成過程の模式図

現在の漁撈活動は、オオシキ（小型定置網）などを中心とした各種の網漁、一本釣りなどのほか、養殖ワカメなどの磯ものとりを中心としている。また、ムラ人の船の個人別所有数は、動力船が4隻、無動力船（1屯以下）が17隻である。動力船の4隻のうち2隻は、大敷網組合所有のもので、個人所有は2隻である。いずれにせよ、4屯未満の動力船と、1屯未満の無動力船で、近年ほとんどが船外発動機を備えたとはいえ、1人ないし2人程度の乗組みによる家族単位の小規模なものである。

沖泊の漁業は、漁具の改良、機械化の導入などによって、漁撈活動に若干の変化をもたらしてきた。しかしながら、こうした一連の近代化過程にもかかわらず、漁村社会特有の獲得経済を基盤とした生活は、潮流の変化による魚種の減少、あるいは大型船による沖釣りなどを起因とした魚獲の減少のため、きわめて不安定なものとなっている。一方では、こうした獲得的経済生活にあっては、個人の技術の優劣がただちに一家の生計に影響を与える。出漁前の潮流、天候の正確な予測、あるいは漁場における捕獲技術は、ある程度先代より伝達されるものであっても、その大部分は個人の能力に負うところが多い。「あれは、畑のウネタテは上手だがアワビの方は全くだめだ」とか「アワビは専門家だが、一本釣りはうまくない」などといった話は調査中にもたびたび聞かされたことである。

これら個人的能力の優劣は、男は主に漁において、女は後述するように、＜ショーバイ＞（行商）先でどれだけ多くのワカメやスルメを売ってくるかといったことに具体化されている。

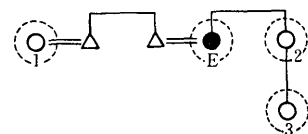
他方、沖泊における農業活動は、昭和30年の後半以降ほとんどおこなわれておらず、若干の家で菜園程度に野菜が作られているにすぎない。背後に急勾配の山をもったこの地では、部落内での活発な農業生産活動が非常に限られていた。しかしながら、戦前までは、周辺部落と同様若干の生産活動、とりわけ戦後の食糧難時代には、イモの生産・出荷もおこなっていた。また、当時は、松江市近郊や旧千酌村（現美保関町千酌）付近にかなりの田畑を所有し、小作させていたといわれる。しかし、これらの土地は戦後の農地改革の結果、皆無となり部落内の急斜面につくられていた僅かばかりの畑地も現在では松を植えるなどして、生産活動は全くおこなわれていない。

ここで若干、沖泊での＜ショーバイ＞について触れておこう。これは明治期の前半に始まったとも伝えられるが、交通機関の発達にともない、行商先の地域も遠方に及び、現在、広島、米子、岡山、鳥取方面を主たる＜ショーバイ＞先としている。＜ショーバイ＞にはだいたい5～6名単位でグループを組み、短くて20日程度、長期になると2カ月くらい出かける。現在、沖泊では28人が＜ショーバイ＞に出ているが、その年齢構成は74才を最年長とし、平均年齢も57才と高齢化している。

さて、この＜ショーバイ＞は行先の地名をとって東条組、岡山・鳥取組、西条・庄原組、米子組の4つの組にわけられている。これらの組がもっている販売領域は伝統的なものであり、個々のメンバーは、自己の＜オトクイ＞を母親ないし姑から世襲的にゆずられてきた。また図3でもみるようにグループの成員も、親子、姉妹、オバなどの親族関係者を中心とし、さらに友人などの若干名を加えた人びとで構成されている。図中の2はすでに引退し、その後を婚出した娘(3)が継いでいる。なお、3の姑は＜ショーバイ＞はやっていない。

一般に＜ショーバイ＞に出るようになるのは結婚後で、未婚女性が出ることはない。そして婚入などによって新たな成員（嫁）が確保されるまで続けられる。しかし、すでにふれたように構成員の高齢化現象は、もはや次代を受け継ぐものを欠いていることを示しており、ムラ人自身も今の代で最後だという。

このように、沖泊において＜ショーバイ＞が家計のなかで占める位置は高く、漁場で男に求められた



○ 構成員
他に非血縁者が2名

図3 <ショーバイ>グループの構成
（西条・庄原組の事例）

ことと同様の個人的技能（女の場合は販売能力）が必要条件として女にも求められてきた。

以上、沖泊における生業形態を中心に記述してきた。周囲を急峻な山に囲まれ、わずかな空間により添うようにして営まれてきた日常生活に、こうした劣悪な自然環境は多くの困難さを強いてきた。それは大規模な漁撈活動を拒み、若年層の流出を促進させるものであった。しかし、一方では個人の能力を主体とした獲得的経済基盤のあり方は、沖泊の社会構造を等質化もしくは均等化させ、身分的階層秩序を排除してきた。以下ではこのムラにおける漁撈活動を、主としてムラ人のもっている漁場の認識、潮流や天候などの自然への知識および伝統的な漁法・漁具から記述していきたい。なお、ここで使用する「伝統的」という言葉は、ムラ人（インフォーマント）が体験的に復原しうる範囲の時代を示すものであり、調査時点にそくしているなら、およそ明治末期を、さかのぼりうる過去の限界としている。

2. 漁 撈 活 動

1) 漁場と＜ヤマミ＞

明治8年（1875）、当時の政府によって実施された「海面官有宣言」（太政官布告第195号）は、それまで村境の延長を地先漁場の境界としてきた沿岸漁村に大きな影響を与えた。それはとりもなおさず海面の国家所有を意味するものであったが、その後制定された「旧漁業法」（明治34年）の施行によって、ここに漁業権制度の確立をみるにいたったわけである〔高桑 1976: 58-61〕。それによって、漁業は政府による許可制となり、漁民は漁業種目の申請によって、はじめて海面での操業が可能となった。ちなみに、現在、沖泊での漁撈活動は、昭和26年に県知事によって許可された、第一種から第三種までの共同漁業権および自由操業（入会）の範囲内でおこなわれている（図4）。その内容については以下の通りである。

第一種共同漁業権

- 1月1日より12月31日まで採取すべきもの（アラメ、雑海藻、カジメ、アワビ、サザエ、イガイ、ナマコ、タコ）
- 2月1日より6月30日までのもの（ワカメ、ハバノリ）
- 3月1日より8月31日までのもの（テングサ類）
- 4月1日から7月31日までのもの（モズク）
- 11月1日から翌年の4月30日までのもの（若ノリ）

第二種共同漁業権

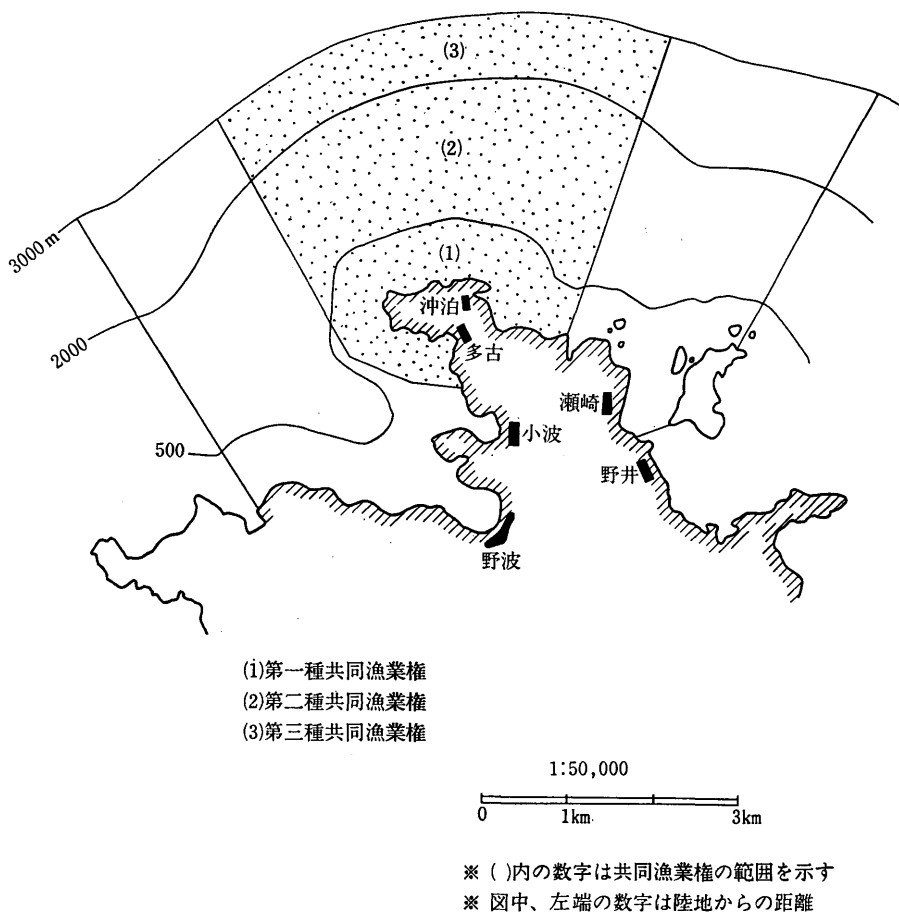


図4 共同漁業権の区割り

- 種目 ○小型定置網 4月1日から11月30日
○つば網 3月1日から11月30日
○敷網(四ツ張網) 4月1日から11月30日
○磯敷網(小型四ツ張網等) 1月1日から12月31日
○磯刺網(立網) 4月1日から12月31日
○施網(小型地曳網, イカ網類)
- 第三種共同漁業権
鯨飼付漁業
鰯付漁業
地曳網漁業 1月1日から12月31日
- 自由漁業
鰯, 烏賊, 雑魚の一本釣漁業
延縄漁業

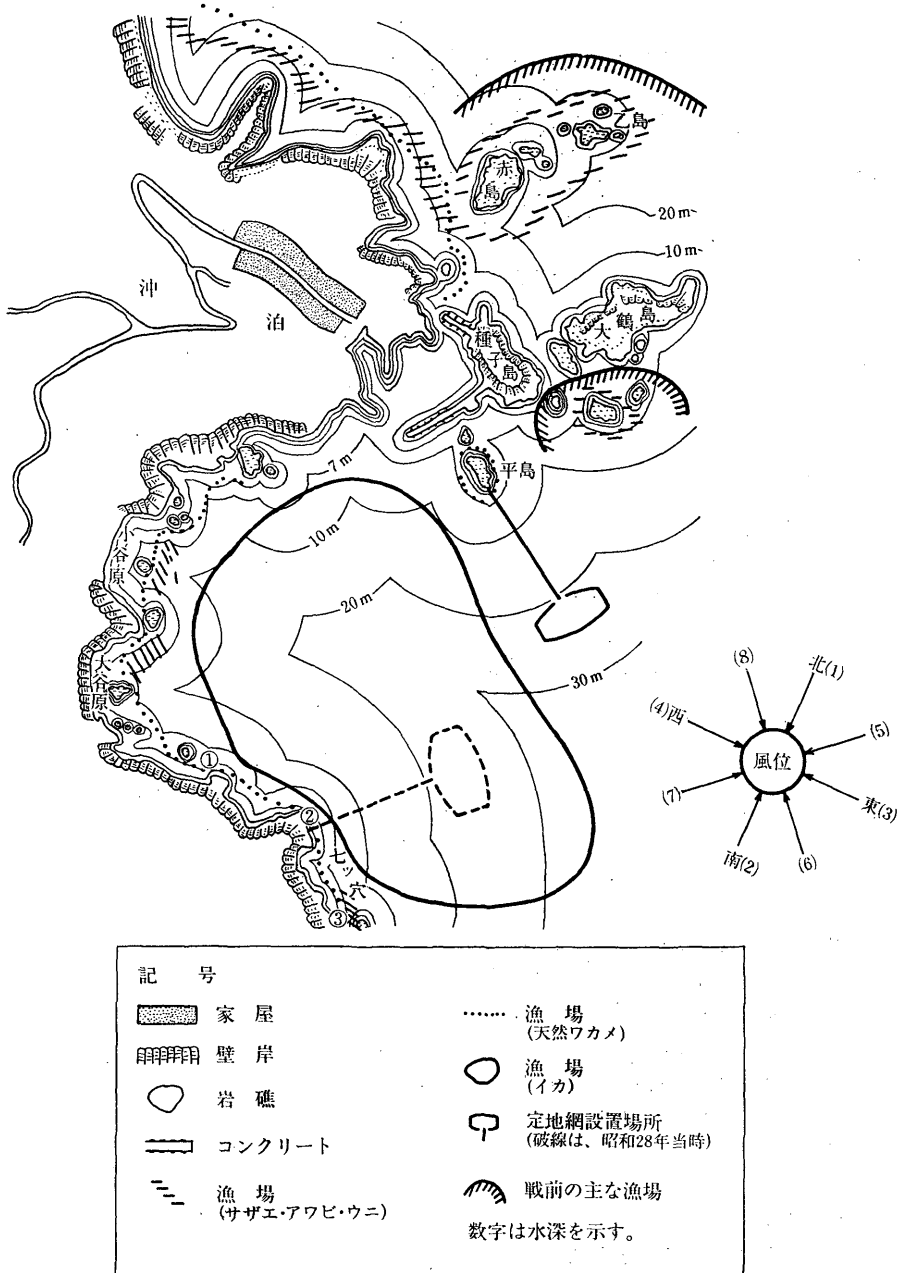


図5 漁 場

現在の操業範囲は多古地区と共同で使用している。図4によれば、沖合 3000 m までがムラの地先漁場ということになるが、ムラ人の日常の漁撈活動はむしろ、陸から 500 m の範囲内でおこなわれている。

さて、図5はムラ人が今日、主たる漁場としている範囲である。漁場のほとんどは水深 10~30 m であり、とりわけ陸に近く水深 10 m 前後の岩礁地帯（瀬）がその中心をなしている。この海域では、サザエ、アワビ、イカ類あるいは海藻などが生息し、好漁場となっている。しかし、こうした漁場も固定化されたものではなく、図にも示してあるように明治・大正期にブリー本釣の好漁場であった大鶴島附近、あるいはイカ類の多くとれた赤島・乙島附近の海域は、今ではほとんど釣漁には利用されておらず、サザエ、アワビの採取地帯となっている。また昭和28年頃まで利用されていた小型定置網の場所も、潮流の変化によって、回游魚の進行経路が変わったため現在的位置に変わったといわれている。

さてこうしたムラ人の認識している漁場は、きわめて狭い海域であるが、もとより個々の捕獲対象物の生息地の選定には、潮の流れ、海洋生物の習性、海面下の岩礁の状態など、多岐にわたる知識を必要としている。これらの知識は、体験的に累積されていくものと、父なり祖父などから学習していくものという二つの側面をもつ。しかし日常の漁撈活動では両者が重なりあっておこなわれていることが多い。たとえば、魚のとれる場所といっても、海に出ればどこでもとれるというわけではなく、ある程度の予測のもとに漁場が選定されるわけである。このある程度の予測を可能にするのが、まさに体験的知識であり、学習された知識である。

漁撈活動でもっとも重要なことの一つに、海上での自分の位置をどのようにして測るかということがある。陸上であれば多くの目標物があり、自己の位置も容易に確認しうるが、広い海上では、何らかの手がかりによる意識的な操作を必要とする〔五十嵐 1977: 139〕。一般に、海上で自己の位置を測定する方法として、「山当て」ないし「山立て」、^{ヤマミ}「山見」などの名称でよばれるものがある。沖泊で<ヤマミ>と称されているこの位置測定法は、単に自己の位置を確認するといっただけにとどまらず、自己が体験した好漁場の位置を記憶する有効な手段となってきた。この<ヤマミ>に利用されるものは、山、岬の先端、灯台、松などあらゆるものに及んでいる。以下では、<ヤマミ>のいくつかの事例を示していこう（図6）。

普通、ムラ人のおこなう<ヤマミ>でたてる目標物はさまざまである。多い人で30以上の<ヤマミ>法の種類をもつが、現在、ムラ人の誰もが共通に知っている<ヤマミ>法は5種類である（図中、1~5）。

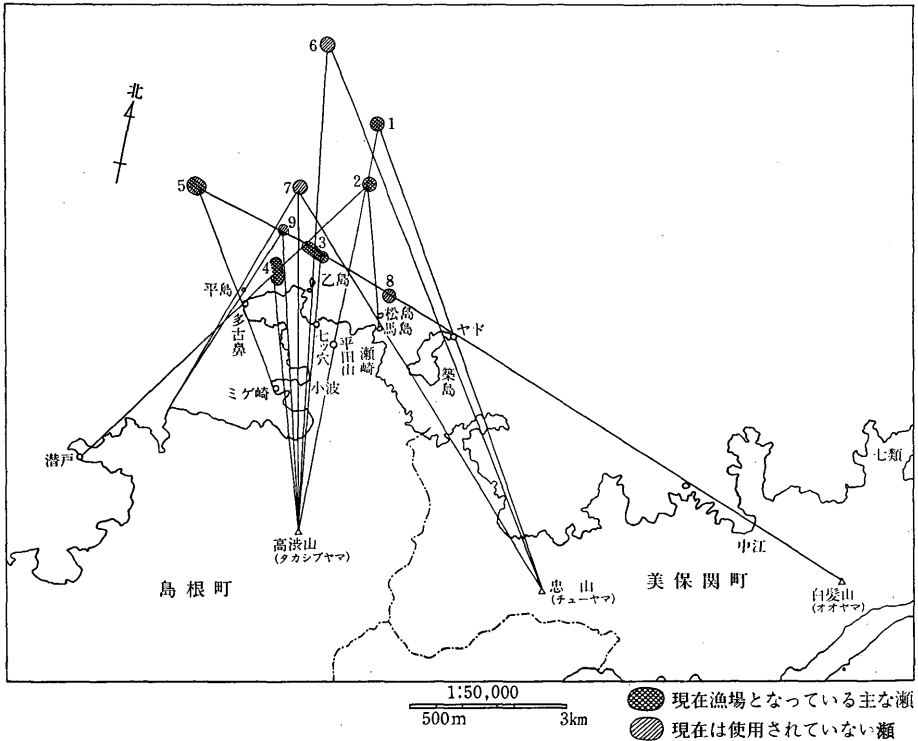


図6 <ヤマミ>の事例

- (1) ハナエゼ： 高浜山（標高 451 m）と平田山（176 m）を結んだ線と、忠山（290 m）とヤド（築島の先端）を結んだ線の合った地点。
- (2) マジマセ： 馬島にある穴と松島の先端を結んだ線と、多古鼻と瀬戸を結んだ線の合った地点。
- (3) オトジマウエノセ： オオヤマ（293 m）とヤドを結んだ線と、高浜山とセツ穴（あるいは、高浜山と乙島）との合った地点。
- (4) サナグリ： 高浜山とシオカケ穴を結んだ線を沖に向かっていく。
- (5) ヤドセ： オオヤマとヤドを結んだ線と、ミゲ崎と多古鼻を結んだ線の合った地点。

以上が、ムラ人の<ヤマミ>による現在の主な漁場であるが、そのほかオジマモタイノセ(6)、ケンサキ(7)、マツシマウエノセ(8)、イソノハナノセ(9)などの瀬がある。

こうした<ヤマミ>の方法には、<ヒトカタアテ>と<フタカタアテ>とがある。たとえば、<サナグリ>とよばれる瀬（漁場）を例にとってみよう。この漁場を探するとき、まずムラの背後にある高浜山の頂上を第一目標とする。次に、<ナダ>に近い

ところにもう一つの目標物（上述の例によるとシオカケアナ）を定め、両地点を直線で結んだ延長線上に＜サナグリ＞を当てるのである。これが＜ヒトカタアテ＞で、つまり既知の二地点の延長線上に漁場の位置を求める方法である。これは、陸から近い距離のとき用いられる。

次に＜マジマセ＞を当てる方法をみてみよう。この漁場は陸から比較的遠いところにあり、＜ヤマミ＞の方法も＜サナグリ＞にくらべやや複雑になる。まず、馬島とよばれる小さな島にある穴と松島の先端とを直線で結ぶ。次に多古鼻と潜戸を同じく直線で結び、両方の直線が交差した地点に＜マジマセ＞を当てるのである。これが＜フタカタアテ＞で、二本の直線、すなわち二方向の＜ヤマミ＞を使っておこなう方法である。これは漁場が遠くにあり、一方向の＜ヤマミ＞では正確な位置を確認できない場合用いられる。

ところで、＜サナグリ＞のように＜ナダ＞のすぐ近くにある漁場では、＜ヤマミ＞の際にとられる目標物が人によって違うということはない。しかし、＜マジマセ＞、＜ハナエゼ＞のように＜ナダ＞から遠い漁場になると、人によって目標物（杉の大木、陸の電柱、灯台など）も異なってくる。そして、より重要なことは、どれだけ良い目標物を多くもっているかである。つまり、海上で、ある目標物がよく見えないようなとき、その代りのものを持っていれば位置確認に支障をきたすことがないわけで、そのために彼らは一つの漁場について数種類の＜ヤマミ＞の目標をもっている。

ムラ人によれば、＜ヒトカタアテ＞を用いる漁場は、瀬が南北に延びているところが多い。ここでのいう南北とは、＜ナダヤマ＞（高浜山、平田山）を基点とする延長線上で結ばれる線で、＜ナダ＞との遠近を測るのに重要な線となっている。他方、＜フタカタアテ＞に頻繁に利用されるオオヤマ、忠山は海上での東西の位置を確認するのに使われている。

1～5の瀬のなかでもっとも遠いハナエゼは手こぎ船で約1時間半の距離にある。直線距離にして5キロほど沖合の漁場である。この漁場にはブリが回遊し、かつては好漁場とされていた。漁期は10～11月で主に一本釣をおこなったという。マジマセも、ハナエゼと同様に、今は殆ど利用されていない。戦前まではイサキの漁場となっていた。オトジマウエノセではボッカ、イサキが釣れた。1～5のなかで、現在でも活発な漁撈活動がおこなわれているのは、サナグリである。

これらの＜ヤマミ＞法の多くは、学習されていくものであるが、常に特定の瀬の魚族が定着しているわけではない。事実、図上の9つの漁場（瀬）のうち、今も使われているのはサナグリだけで、他はすでに魚族がいなかったり、もしくはムラ人自身が殆ど

行かない場所である。このことは、ムラ人にとっては常に新たな漁場の開拓が求められてきたことを意味する。＜ヒトカタアテ＞とか＜フタカタアテ＞と表現される伝統的なくヤマミ＞のタテ方も、基本的なことは父や祖父などから学習するにせよ、その後は、新たな漁場を探すことによってよりうまいタテ方を工夫していかなければならない。そうしたタテ方に個人の能力がかかわってくることが多い。それ故、＜ヤマミ＞によって認識している漁場の数に個人差が生じることになるわけである。

2) 漁 期

表1は、沖泊における漁業暦を示したものであり、表2は、昭和50年度の魚種別数量水揚げの一覧である。漁業暦の決定は、ウニ、サザエ、アワビのように漁業法によって禁漁期間が定められたものもあるが、魚族の回游時期、その生育過程、あるいは潮流、風位などによっても決められている。なかでも、ムラ人にとっての大きな関心は、風位にあるといってよい。以下では、ムラ人の風位観について記述しておこう。

ムラ人の認識している風位は、基本的には8つに分類される(図5参照)。(1) 北：タカカゼ (もしくはオキカゼ)、(2) 南：デノカゼ、(3) 東：コチ (もしくはアイノカゼ)、(4) 西：ニシカゼ、(5) 北東：ナカツ、(6) 南東：イセツ、(7) 南西：ハエ、(8) 北西：アナジ。このなかで、タカカゼを中心として、ナカツ、アナジの北寄りから吹く風は、海が荒れ、漁には不適な風で、冬期(12～2月)には殆どこの風が吹き荒れる。それに比べ、デノカゼが吹く(5～9月)と、海上はナギが続き、漁にはもっともよい時期となる。コチは、寒があげたことを告げる風である。

これらの風位を知ることによって、ムラ人は出漁時期、回游魚の到来を予測するわけである。沖泊で年間を通じてもっとも水揚げが多く、活況を呈するのは、5～9月にかけてである(表2参照)。つまり、沖泊に住む人びとにとって、年間の漁撈活動の多くが、この時期に集中しているわけである。

そこで、次にムラにおける伝統的な漁撈活動を、主として漁法・漁具の点からみていこう。

3) 釣 漁

現在おこなわれている釣漁は、イカ類を対象としたイカ釣り、スズキ釣り、イサキ釣りであるが、実際には、イカ釣りを中心としている。かつては、ブリ釣りもおこなっていたが、今は殆どおこなわれていない。

表1 魚 種 別 漁 業 暦

漁期 (月別) 魚種別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
サ サ イ カ												
ス ル メ イ カ												
マ イ カ												
サ ザ エ												
ウ ニ												
ブ リ												
タ イ 類												
ス ズ キ												
ト ビ ウ オ												
養殖ワカメ												
天然ワカメ												

----- は禁漁期間

さて、これらの釣漁の漁場も、戦前と戦後では大きく変った。たとえば、戦前まで、あるいは戦後間もない頃まで、一本釣りの好漁場となっていたハナエゼ、マジマセには、今では魚族は殆ど生息しない。それまで、ハナエゼは秋漁の場所として、タイ、ブリ、サンマ、イカなどの生息海域として、一方マジマセは、夏漁の漁場として、主にイサキなどをとっていた。とりわけ、ブリ釣りは、現金収入としてもよかったため、ムラ人の多くが従事したという。

ブリ釣り ブリは「潮が通った」場所を好むといわれ、上記の瀬のほか、サナグリで

表2 昭和50年度 魚 種 別 数 量 水 揚 高 調 査 表

(資料：野波漁業協同組合沖泊支所)

魚 種 月 別	タイ類	ブリ類	ハマチ	ヨコワ カツオ	イサキ スズキ	トビウ オ	ア ジ	マルメ イカ	ケンサ キイカ	ヤリイ カ	タ コ	サザエ	アワビ	ナマコ	ウ ニ	モズク	板ワか メ	バイ貝
1		5								18	7	113	38	34				
2	2	4								285	42	105	44	13		32	18	
3	3	4								75	32	422	25	28		28		
4	64	18			13						19	1303	40					
5	79	279	53		3				220		91	1033	12					
6	93	260	5		205	301			191	24	156		67		2			93
7	10	78			2						107	4141	104		※			42
8		10	3		10				10		14	2375	41		※			8
9	27	81			14		2					1050	58		※			
10	18	13		2			35	10			62	866	17		※	30		17
11		20					2				14	372	13	5		36		
12	5	752	33							29	15	330	94	79		229		

(単 位 : kg)

注1. 表中では水揚高(金額)は割愛した。

注2. ※印は、金額のみ記載されていたもの。

もよく釣れた。潮の流れは、その日によって違うが、ブリは、主に西から東へ通る潮（風位でいえば、ニシカゼ）にのってきたので、潮の流れをよく見極めて、自己の位置を決めたという。その際、舟の位置は、潮の流れと同じ方向に向けた。このブリ釣りは10～2月にかけておこなわれる。また餌として、昔はイカの生餌を使っていたが、今ではサンマを用いている。ブリ釣りでは、手釣り<ブリナワ>と竿を使っての一本釣りが使い分けられていた。これらのブリ釣りには、かつては、<ナカ>（ブリナワをもつ）、<トモ>（かじをもつ）、<ヘサキ>（帆を操作する）の3人で乗り組んだという。ほかの釣漁でもそうであるが、ブリ釣りには、昔から擬似餌が欠かせなかったが、当時は、イカの生餌も使われていた。生餌の作り方は、まずイカの皮を剥ぎ、針を通すための穴をあける。次に、竹製の針で釣針のひもを結び、塩吹穴から内部に差し込む。竹針はそのまま先端の穴から出し、釣針の先端はイカの口に刺す。最後にカズラのひもで、釣針のひもを固定する（図7）。こうして出来上がった生餌は、130ピロ程度（約200m）の釣糸につける。その際、30ピロ（約45m）ごとに釣り糸の太さを少しずつ変え、手元から先にいくにしたがって細くしていく。また、オモリは先端（針先）にいくほど重くした。こうした操作は、海中でナワが沈まないための工夫である。なお、戦前までは、釣糸には<マキヨマ>と呼ばれるものを使用していた。<ヨマ>は、麻糸をよって作るが、<フタツヨリ>、<ミツヨリ>といったように、麻糸の本数によって区別されていた。また、<マキヨマ>に対して<シブヨマ>という区別もあった。<シブヨマ>は、麻糸によった<ヨマ>に、柿のシブをつけたものである。これに対して<マキヨマ>は<シブヨマ>にミシン糸を手で巻きつけたもので、<シブヨマ>にくらべ、潮の抵抗が少なく、海中でよじれることが少ないといわれる。なお、<シブヨマ>は、船を海上に固定させて魚をとる<タテヅリ>に使われ、一方、<マキヨマ>は、船を走らせながら釣る<ヒキヅリ>に用いたという具合に、両者は、巧みに使い分けられていた。普通、ブリ釣りに使用するには、130ピロ必要となるが、その製作には半年を要したといい、誰もが大切に扱った。たとえば、操業中<マキヨマ>が切れた時には、すぐ<ヤマミ>をして、その位置を確認し、<サデ>とよばれる鉄製の引き揚げ具を使って、海底を引きながら糸を探した

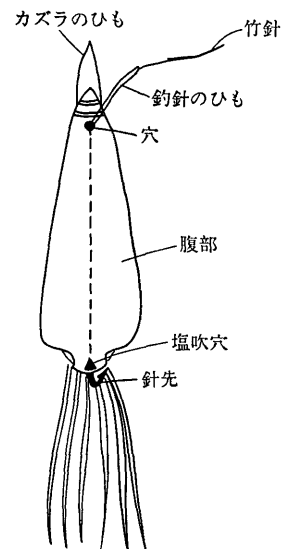


図7 イカの生餌

というムラ人の話しにも、それがうかがわれる。ここにも、＜ヤマミ＞が単なる学習的な知識ではなく、体験的に得たものでなければ役立たないことが実証されている。

イサキ釣り これは6月中頃から7月にかけておこなわれる。＜ヨマ＞は、ブリ釣りと同じ＜マキヨマ＞を使い、＜ナマリ＞のついた＜ヨマ＞の先端に、10ピロ（15m）の長さのナイロン糸をつけ、その先に擬似針をつける。ナイロン糸は5号程度のものを使う。擬似針は今では、境港（鳥取県）の釣具店から購入する。

スズキ釣り 漁期は3月から6月いっぱい。＜ヨマ＞は、ブリ釣りのものと同じだが、＜ヨマ＞の先につけるナイロン糸は、10号ほどの太糸を使う。漁場は、サナグリが主である。

イカ釣り 釣漁のなかでも、中心をなしているイカ釣りは、ワカメと並んで、古くからこのムラでの主要な商品となってきた。魚と違って、イカ釣りには瀬はあまり関係ないという。したがって、漁場も＜ヤマミ＞をすることはまれで、殆どが陸近くでの操業となっている（図5参照）。イカ釣りに使用する漁具は、竿と擬似餌といった簡単なものである（図8）。ただし、これらの漁具は、アオイカをとる時だけ使用される。釣糸は15ピロ（約20m）程度の短いもので、海上に舟を固定し、海面をひきずるようにしてイカを釣り上げる。イカ釣りに重要なものとして、擬似餌針＜エビガタ＞があげられる。桐の木でつくられるこの針は、微妙な曲線のつけ方と、ナマリのバランスの良し悪しで、海中での動きが決まるという。したがって、上手に出来た＜エビガタ＞は、何にもまして大切にする。

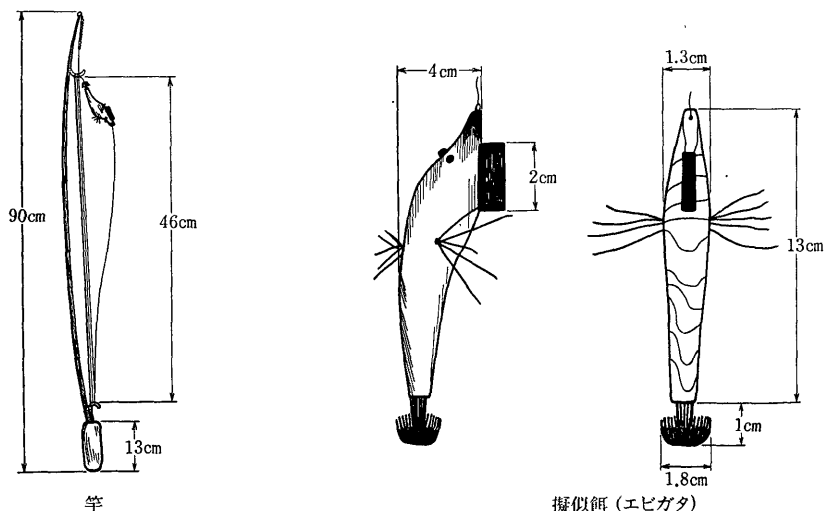


図8 イカ釣り具

以上、沖泊の釣漁を概観してきた。釣漁の主要捕獲対象物であるイカ類の多くが、近年、水揚げの減少におちいつている。これは、イカ類そのものが地先までやって来なくなったことによっているが、ムラ人は、隠岐島近海を中心とする大型船によるイカやその他の魚の大量捕獲のせいだと考えている。

4) 網 漁

現在、ムラでおこなわれている網の種類は、刺網（サザエの三枚網）、カサ網、オオシキ（小型定置網）である。ちなみに、戦前までおこなっていた網漁としては、＜ヒアミ＞（4つ張網、5つ張網）、地曳網などであった。まず、戦前の網漁について触れていこう。

4つ張網・5つ張網 いずれも終戦後間もない頃までやっていたが、漁具が大きいの

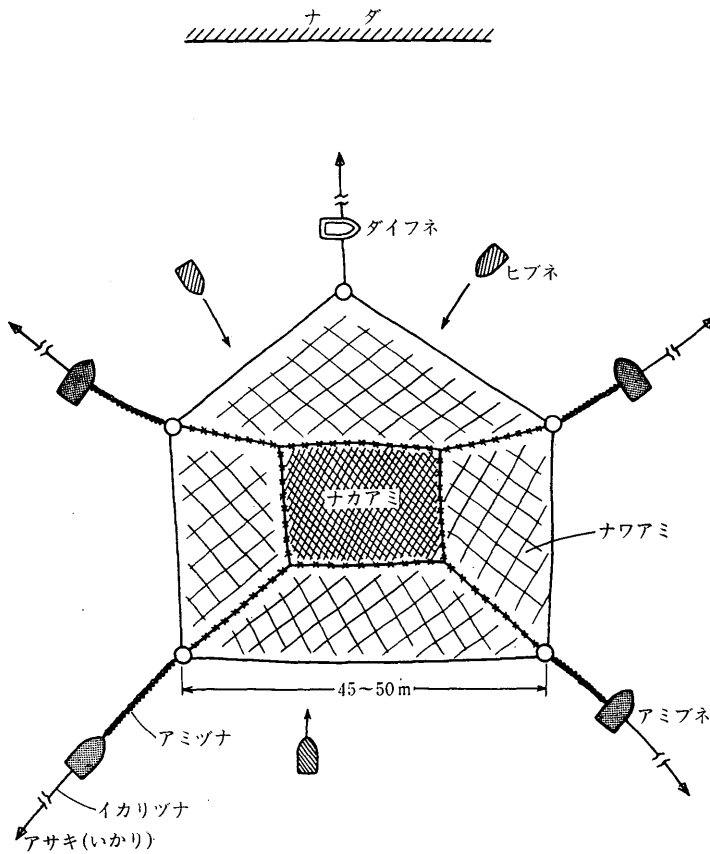


図9 <ヒアミ> (5つ張網)

と操業に多人数を要するため、今では全くおこなっていない。ここでは 5 つ張網を例にとってみよう(図 9)。これは一辺が約 50 m ほどの正五角形の網地をナワアミ(外側の荒目の網)とナカアミまたはミアミ(魚が直接入る網で細目)との組み合わせで構成した、スズメダイ、アジなどをとる漁法である。この網漁に参加する船は、まずナワアミの 5 角を支える<アミフネ>(5 隻)、ナカアミを運搬する<ダイフネ>(1 隻)、それに夜間操業に備えて<ヒブネ>(2~3 隻)の合計 8~9 隻に及ぶ。各船には 3~4 名乗り組むため、30 人前後は必要となってくる。4 つ張網もこれとほぼ同じだが、網自身は一辺が 15 m と比較的小型のものである。これは、スズメダイのように瀬に向かってやってくる魚を対象とするが、この魚は物の気配を感じると真下に進む習性をもっている。そのため、網は瀬などの上に沈めておき、集魚灯に近づき、網の真上にきたのをみはからって一斉に網を引きあげてとらえるわけである。5 つ張網では<ナカアミ>があって魚群が逃げないようにするなど、4 つ張網にくらべて工夫がなされている。また、<ヒブネ>の使う灯火も大きな変化をとげた一つであろう。古くは松の根株などを燃やして灯りとしていたが、その後、カーバイト、ガス灯、バッテリーと移行し、それにともない明るさも飛躍的に増大した。しかし、一段と明るくなった直後の操業では、明るすぎて魚群が近寄らなかったともいう。

小型地曳網 先の 4 つ張網・5 つ張網同様、この地曳網にも多数の人数を要した。これは一般には<イワシアミ>と称されていたが、ナダが砂浜でなく岩礁地帯であったため、網が破損するなどの被害が多かったという。それを防ぐため、網の引き上げのときには、瀬に 10 隻ほどの船がでて、ひっかからないように持ちあげることもした。この<イワシアミ>にはムラで親子で漁師をしている家なら誰でも参加できた。

ここで注目してよいのは、当時<ナダ>に 2 軒の<アミゴヤ>があったことである。この<アミゴヤ>の管理をするために<アミヤド>の家が決められた。この<アミヤド>は戦後しばらくまであったが、それになるためには、まず家内構成がよいことが最大の条件とされた。ヤドの主な仕事は、魚の出荷の時荷主になることであったが、ヤドをしていると魚獲の配分も 2 人前もらえた。しかし、ヤドのもっとも大切な役目は、新暦 2 月 13 日におこなわれるエビス祭りのときである。この日には、エビスさんに供えるシメナワをうつのである。ヤドの交代は、5 月の畑の植え付けが終る<シロミテ>の時におこなう。昔は、来年のマツリにどれだけ必要か計算して、皆に割り当て冬の間にナワになったという。そして、それぞれがなったナワをより合わせ大きなツナをつくった。ヤドの当主は、当日、神さんにオミキと魚をそなえる。ここでヤドになったものは、一年間の漁の責任を持つ。アワビやサザエの口明けの時、ナダに出て

合図をするなど、そうした仕事のひとつとされている。このヤドも、イワシアミがなくなるのとはほぼ時期を同じくしてなくなった。

このほか、＜アゴアミ＞（トビウオの引き網）、＜エビアミ＞などもおこなっていたが、いずれも5～6年ほどの短期間で終わってしまった。とりわけ、＜アゴアミ＞の場合は沖合での流し網漁が盛んになるにともない＜ナダ＞までトビウオがやってこなくなったため、わずかの間の操業となった。

次に、現在の網漁について触れていきたい。それは大きく分けて、組合経営の＜オオシキ＞（小型定置網）と個人操作の刺網（サザエの3枚網）ならびにグループでの＜カサアミ＞がある。

オオシキ 現在の＜オオシキ＞は、もともと沖泊の部落経営であったが操業不振により、小波部落へ売ったもので、今は小波で7人の共同出資によって運営されている。沖泊からは5人が網子として参加しており、漁場の借賃として、小波側は沖泊に水揚げの20%を支払っている。このオオシキの設置方法も、初期の＜三角オオシキ＞から土佐式、越中式と移り変わり、現在の改良土佐式に至っている（図10）。網をあげるのは、今では朝と夕方2回だが、かつては夜中にもあげた。ことにイワシ、カマスなどの魚は、時期をみて網をあげないと皆、逃げてしまったという。それもイワシが殆ど姿を消し、＜オオシキ＞での主要捕獲魚種もイサキ、ブリなど大型化するにともな

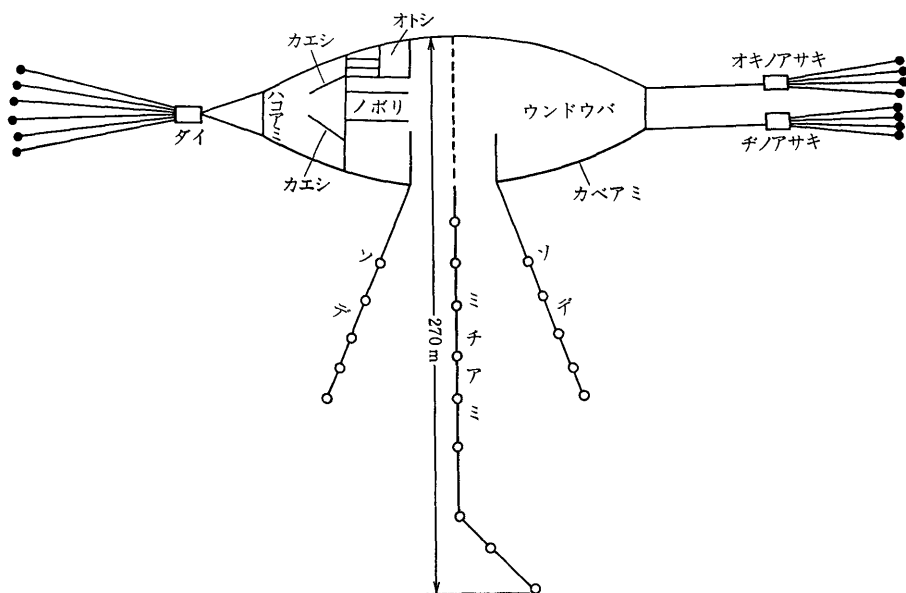


図10 オ オ シ キ

い、逃げだす心配がなくなったこと、および魚そのものが3回もあげねばならないほど沢山とれなくなったことなどによって、現状の2回の引き揚げになった。また、＜オオシキ＞の位置が変わったのは、潮流の変化にともなう回游魚の周回コースが変わったためである。

サザエの3枚網 サザエの捕獲は、もともと見突き漁でおこなっていた。それが10年ほど前に網を使ってサザエを獲る技術が導入されてからは、次第に網を利用する人が増えた。見突きでは、せいぜい6～7mぐらいの海底のものしかとれなかったが、網の登場によって15～20mぐらいの深さのものまでとれるようになったためである。もっとも当初は、サザエよりも魚の方がとれたという。網の構造は、細目の網＜ナカアミ＞を荒目の＜ガワアミ＞で両側からはさむような形をした、いわゆる3枚網である(図11)。5反を＜ヒトモヤ＞とする網の長さは、ほぼ270mほどであり、この網をサザエの生息地である瀬(岩礁)づたいにかぶせるようにして一週間ぐらい沈める。

この3枚網はまた、浮刺網としても利用されている。その際には＜ヒトモヤ＞を7～8つほどつなげて設置する。これらの操業は、いずれも夫婦、兄弟などを単位とする1～2人の乗り組みによっておこなわれる。浮き刺網の場合、夕方漁場に張って翌朝引きあげる。その際、網は直線的にではなく波形ないし円形状に張る。また、あまりウキをつけると、ナマリが浮いてしまって網が不安定になるので、大体＜ヒトモヤ＞に150個ぐらいに押える。この刺網では、イシダイ、スズキ、メバルがとれ、漁期は、ほぼ3月の末から9月にかけてである。

このほか、3つのグループで操業している＜カサアミ＞がある。これは夏を除いて年間おこなわれており、タイ、ブリなどをとっている。これに使われる網も3枚網であるが、浮刺網やサザエ網にくらべ、＜ミチアミ＞(魚群の誘導壁)をつくるなど、

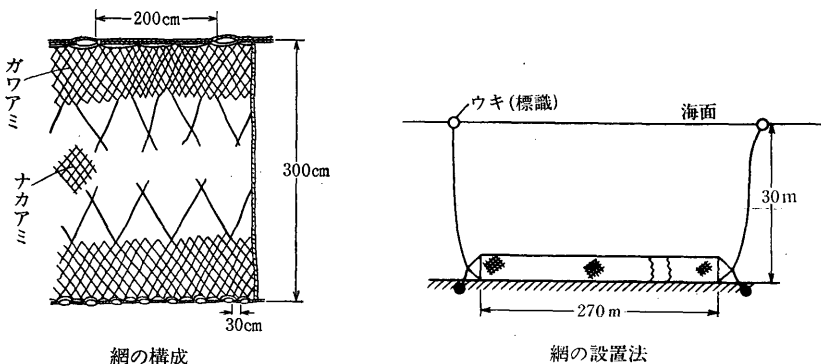


図11 サザエの三枚網

若干大がかりになっている。このように、戦前におこなわれた多人数による大規模な網漁の形態から、夫婦ないし友人などを中心とした小規模なものへと移り変ってきた。こうした傾向の要因としては、直接の担い手である若年層の部落外流出があげられよう。

5) 見突き漁

沖泊における見突き漁は、サザエ、アワビ、ナマコ、ウニ、タコを捕獲対象物としているが、サザエは今日ではすでに記述したように網漁法によってかわられている。

＜カネギ＞あるいは＜カナギ＞と称されるこの見突き漁で使われる漁具はそれほど多くはない（図12～13）。＜サザエヤス＞は、3本ヤスであるが、先端部が丸くけずられており、ヤスも並列的に配置されているのではなく、三角状になっている（図12）。これは、突くというよりも、はさみとるという機能をもたせたためであり、サザエを傷つけないための工夫であった。また、柄の長さも12mを最長として、8m、7mと3種類あり、生息場所の深度に応じて使い分けている。同様のことは、＜アワビカキ＞、＜アワビホコ＞についてもいえる（図13）。アワビの採取は、今も盛んにおこなわれているが、たとえばアワビが比較的平坦なところにいる場合には、＜アワビカ

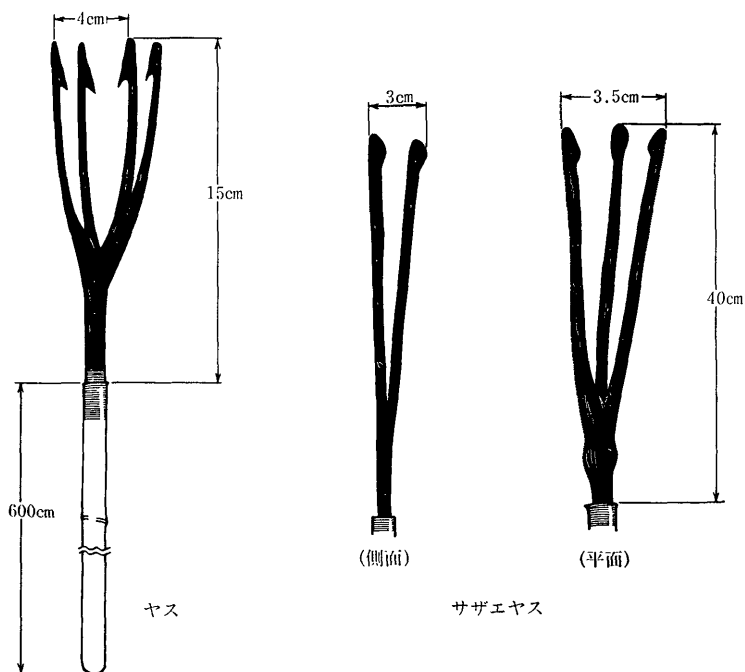


図12 見突き漁でつかわれる漁具①

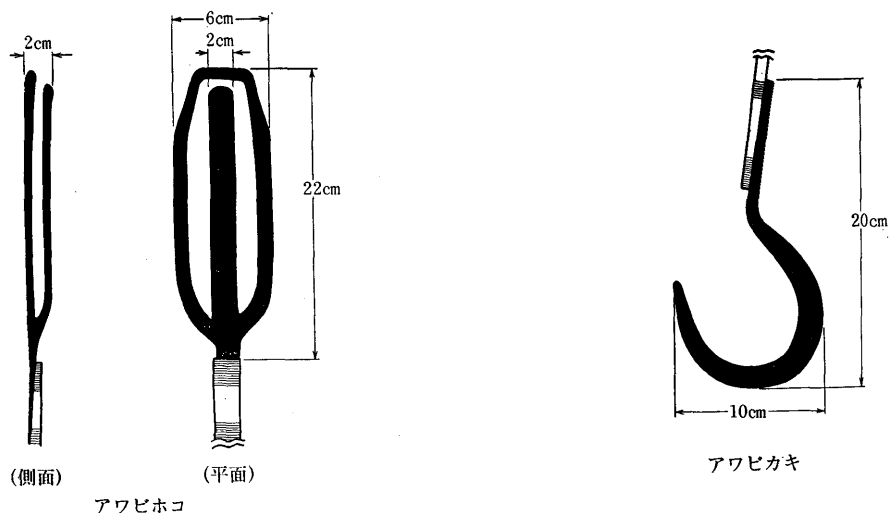


図13 見突漁でつかわれる漁具②

キ>ではがし、岩礁などにいる場合には<アワビホコ>ではさみとるといったように2種類の漁具を使い分けている。いわば、<アワビカキ>は突剝具、<アワビホコ>は突挾具といえるだろう。このほか、図12のように、ナマコ、ウニ、タコを突くときには、<ヤス>が利用される。なお、アワビとり用の2種類の漁具は、鉄製部分と柄とを細い割竹で装着しているが、これは海底でシナリやすくするためのものである。

6) 磯ものとり

かつて、ムラ人の生計はイカとワカメで維持されていた、とムラの古老が語ったことがあった。事実、磯ものとりでワカメの占める収益は群をぬいており、今日もムラ人の生計の重要な部分を占めている。

ワカメとり 12～13年前にワカメの養殖技術が導入されるまでは、このムラのワカメはデワカメ（天然ワカメ）が主流を占めていた。しかし、今ではそのほとんどが養殖ワカメになっている。デワカメは4月1日から5月にかけての2カ月間が解禁期間となっている。現在、養殖ワカメをおこなっているのは13軒である。養殖ワカメの種は、瀬崎、県の水産試験場から購入してくる。まずはじめに、150mほどの長さの化繊のロープ（太さは8分～1寸）を<オモツナ>として張り、それにワカメの種のついた<タネイト>を巻きつける。<オモツナ>を張る場所は決まっていて、毎年、<クジビキ>でその順番を決める。図5中の①から③がその場所とされているが、それらは瀬によったものである。ちなみに①はウチジャクリ、②はムカヤマグチ、③はヤマン

ャクリという瀬の名がそれぞれつけられている。①では6軒、②は7軒、③が2軒というように振り分けられている。合計が13軒を越えているのは、一軒で〈オモヅナ〉を2本張っている家があるためである。〈オモヅナ〉を張る期間は、10月から5月末までである。この養殖ワカメは2月末から4月にかけてとる。その後、天然ワカメのかりとりが続くので、ムラ人にとってこの時期は年間でもっとも多忙な時期となる。ワカメをかる時間は、朝の8時から夕方5時と決められている。船の出る日は、部落定会で相談して決まるが、船を所有しない者は、〈ショイコ〉をかついで〈メノハガマ〉でとった。〈メノハガマ〉の大きさ、板の長さも3種類あり、岩礁の状態によって使いわけた。天然ワカメは、かりとってからそのまま天日で干すが、養殖ワカメの方は、何度も水洗いし、ワカメしぼり機で水分をとったあと、乾燥機で4～5時間乾燥させる。〈ナダ〉で干すときも、干す場所はクジで決められた。

ノリ・テングサ ノリとりは、11月下旬から3月末までにおこなわれる。〈ホバイ〉(灰)をノリにかけて、手でこすってとる。朝の8時から夕方5時までの制限はワカメとりの場合と同じである。ノリとりは女性の仕事で、婦人会でナギの日を選んで出かける。現在、沖泊は4組に分けられているので、それぞれが交代でいく。これらのノリは、巻き寿司用のノリとして売られる。一方、テングサは浅いところに生息するが、3年前からムラ人はほとんどがとらなくなった。これはテングサ自身の単価が安いことによっている。

以上、磯ものとりについて触れたが、いずれにせよ、そこから得る収入のほとんどがワカメであるといってよい。こうしたワカメ、ノリ、それにイカ類を売るために、古くから他県に〈ショーバイ〉に出ていった。そしてその担い手が、主婦であることについてはすでにのべたとおりである。そこで、この〈ショーバイ〉について、若干、付言しておきたい。

〈ショーバイ〉に出かける回数は、グループによって多少の違いはあるが、大体、年に5回である。

1回目： 3月末～4月上旬(20日間)、このときには養殖ワカメをもっていく。

2回目： 4月下旬～6月中旬(20日間)、このときにはザワカメをもっていく。

なお、ワカメ以外にもっていくものは、巻き寿司用のノリ(5～6ソク：1ソクは10枚)、ケンザキイカ(3～5kg)、サキイカ(スルメをさいたもの)などでいずれも松江の間屋で仕入れる。

3回目： 7月下旬(7～10日間)、盆前にいく。持参するものは前2回と同じ。

4回目： 9月末(20日間)、この時期には祭が多いので、普段よりは多くもっ

ていく。

5回目： 12月初旬（20日間）、このときは、ケンザキイカ、イリをもっていく。

以上、記したように1年のほぼ3分の1は〈ショーバイ〉に出ていることになる。現在4組のグループがあり、それぞれの行く先を異にしている。また、同一グループにはいっていても、個々人はそれぞれ別の〈トクイサキ〉を持っている。こうした〈トクイサキ〉は、〈ショーバイ〉を引退するときに、ヨメに受け渡した。その場合、ヨメと一緒に2年ほどは〈トクイサキマワリ〉をするという。なおケンザキイカは、かつては自家でとれたものをもっていったが、今は獲れなくなったため松江の間屋から仕入れて持っていく。また交通機関の発達、同時に大量の輸送を可能にし、短期間の効率よく〈ショーバイ〉をも可能にした。しかし、こうした伝統的な〈ショーバイ〉も、後継者が少なくなりつつある現在、減少している。

お わ り に

恵まれない集落立地、あるいは沖合漁村への展開をはばんできた自然・地理的条件。そのいずれもが、磯漁という、いわば地先漁場での操業を余儀なくさせるものであった。そうした諸条件の制約のなかで展開されてきた、伝統的な漁撈活動は、当然のこととして小規模なものにとどまらざるを得なかった。それは、明治時代に、ナダから1屯たらずの小船に帆をかけて勇躍、隠岐島近海にまで出漁した姿とはかけはなれたものであった。確かに周辺の漁村が当該社会と同じように、地先漁業を主としていたときには、お互いに共有できる体験をもっていた。しかし、その後みる沿岸漁村からの脱皮という、それぞれの村が歩んだ展開過程は同時に共有できる体験をなくすことになった。それはまた、沖合での大規模な漁業によって〈ナダ〉まで魚群がこないという地先漁場の実質的価値の低下ないし喪失という結果をももたらした。かつて、何十種類もの〈ヤマミ〉の技術などムラ人が蓄積してきた漁場認知の知恵が大きな変更を受けざるをえなくなったことなどそのあらわれといえよう。

本稿では、ムラの伝統的漁撈活動についての記述につとめてきた。その過程で当該社会が置かれている自然・地理的条件の劣悪さを指摘し、それらが少なからず、ムラの漁撈活動に影響を与えてきたことにも触れた。もとより、所与の社会がすべてそうしたエコロジカルな条件に規制されうるわけではない。この点に関して筆者は別稿で、当該社会の構造的特質を親族諸慣行の点から指摘した [大胡 1976] が、本稿は、その報告と対をなすものである。

謝 辞

本稿がまがりなりにも執筆できたのは、調査地の皆様の絶大なる御協力によっている。とりわけ、小川金信氏（島根町役場産業課長，当時），小川登氏（沖泊区長，当時），小川孝吉氏，小川啓之助氏，野田キミ氏の方々には御多忙にもかかわらず，調査期間中有益なお話を伺うことができた。ここに改めて感謝の意を表したい。

最後に，調査中お世話いただいた小川佐一氏，野田常氏があいついで亡くなられた。ここに，ところより御冥福をお祈りいたします。

文 献

秋道智彌

1977a 「下北半島大間漁民の技術的適応」『人類学講座12』 雄山閣，pp. 94-115。

1977b 「伝統的漁撈における技能の研究——下北半島・大間のババガレイ漁——」『国立民族学博物館研究報告』 2 (4) : 702-764。

栄川省造

1974 『魚名考』 甲南出版社。

端 信行

1979 「サンゴ礁海域における磯漁の実態調査中間報告 (1)——石垣市登野城地区漁民社会の若干の分析——」『国立民族学博物館研究報告』 3 (3) : 520-534。

五十嵐忠孝

1977 「トカラ列島漁民の“ヤマアテ”」『人類学講座12』 雄山閣，pp. 139-161。

亀山慶一

1963 「漁撈と信仰」『西石見の民俗』（和歌森太郎編）吉川弘文館，pp. 70-91。

日本学士院

1959 『明治前日本漁業技術史』 日本学術振興会。

大胡 修

1976 「島根半島一漁村の親類」『国立民族学博物館研究報告』 1 (3) : 604-617。

山陰民俗学会

1963 『島根県下30地区の民俗』 山陰民俗学会。

島根県教育委員会

1971 『出雲中海沿岸地区の民俗』 島根県教育委員会。

祖父江孝男・大給近達・中村俊亀智・大塚和義

1978 「物質文化研究の方法をめぐって」『国立民族学博物館研究報告』 3 (2) : 280-336。

須藤健一

1979 「サンゴ礁海域における磯漁の実態調査中間報告 (2)——石垣市登野城地区漁民の潜水漁法——」『国立民族学博物館研究報告』 3 (3) : 535-555。

高桑守史

1976 「漁撈活動と漁村社会——沿岸漁村の諸相——」『日本民俗学講座1』 朝倉書房，pp. 36-81。

谷 巖（監修）

1959 『漁網図鑑上・中』 農林統計協会。

辻井善弥

1977 『磯漁の話——一つの漁撈文化史』 北斗書房。